SIDE A-1

十年ぶりに聞く篠田の声はやけに耳にうるさかった。大学で同じサークルに所属していた篠田とは、学生時代、妙にウマが合ってよく行動をともにしていた。テニスサークルとは名ばかりの飲み会サークルだったが、お互いそんなことは気にもせずに、毎週のように飲み歩いた。俺にとって篠田とは大学時代そのものだったと言っていい。それが、卒業後、ぱったりと連絡を取らなくなった。仕事や新しい人間関係にいっぱいいっぱいで、なんとなく連絡を取れずにいたのが長い時間続いて、いつしか連絡しづらい間柄になっていた、というのが表向きの理由だ。いまや、篠田とは年賀状のやり取りでしか繋がっていない関係。その篠田からの電話だった。

「ちょっと会って話せないか？」

電話越しに聞こえてくる篠田の声は重く沈んでいて、気軽に断れる雰囲気ではなかった。俺は「いいよ」と答え、場所と時間を指定した。篠田の家と俺の家のちょうど中間辺りに位置する駅の飲み屋で、仕事終わりに寄れるぐらいの時刻。会社勤めをしていない俺にとっては精いっぱいの気遣いだ。

「わかった。それじゃ、またあとで」

電話はかかってきた時同様に唐突に切れた。十年ぶりの連絡だ。何もないわけがない。俺は何が起こるのかをぼんやりと考えていた。

夜九時、約束の時刻に俺は店に入った。ごくごく一般的な居酒屋は、平日にもかかわらず結構込み合っていた。店内を見回すと、奥のほうの二人掛けのテーブル席に篠田の姿があった。軽く手を上げると、篠田も気づいたらしく、こちらに向かって片手を振ってみせた。

席に着いて気づいたのだが、篠田はすでに何杯か飲んでいるらしく、ちょっと様子がおかしかった。ヘラヘラと笑いながら「まぁ座れ」と言い、それきり口を噤んでテーブルをじっと見つめている。俺は篠田が何を言い出すのかを待ちながら、緊張して席に着いた。

店員にビールを注文すると、何も喋ることがなくなり、俺らの間にはただ沈黙が流れた。にぎやかな店の中で、ここだけがまるでお通夜のようだった。「話がある」と言ったくせに、何も話しはじめない篠田を前に、俺はただ黙っていることしかできなかった。篠田は下を向いたきり、やはり何も語らない。そうしているうちに、ビールが運ばれてきて、テーブルの上に載せられた。乾杯する様子もないので、しかたなく俺は軽く口をつけた。

十年経ったのが嘘かのように篠田の見た目は篠田のままだった。よく見ればそれなりに歳はとっている。でも、なんというか、根本の部分は何も変わっていない。細面の顔に似合わない大きな鷲鼻、その上にちょんと眼鏡が乗っている。大人になると人間の見た目なんてそうそう変わるものでもないんだな、と俺は沈黙のなかで、そんな的外れなことを考えていた。どれくらい時間が経っただろう。篠田は何かを決意するかのようにビールを喉に流し込むと、ようやく俺の顔を見た。

「じつはさ」

声が重い。ついにはじまった、という感覚が俺にはあった。

「ちょっと頼まれてほしいことがあるんだ」

予想通りだ。十年ぶりの頼みごと。簡単なことではないだろう。篠田は俺の顔を見ていない。それが余計に頼みごとの重さを物語っているように、俺には思えた。

「ある男のことを調べてほしいんだ」

それから篠田が語ったのは、次のようなことだった。

一週間ほど前、篠田は一人の男とバーで知り合ったという。まったく面識はなかったが、お互い一人で飲みに来ていたこともあり、篠田は生活のことなどをいろいろ語ったそうだ。名刺を渡すと、男は困ったような顔をして「名刺は持っていないんです。名前は田中昴と言います」と言った。男の年齢は三十代半ばほど。やけに細身の体型で顔は目が細く色白で狐の面のようだったらしい。男は相槌を打つのがうまく、会話のほとんどは篠田の一人語りだった。そこで篠田は日頃の愚痴を男にぶちまけた。男は深く頷きながら最後にこう言ったという。「人生は心地よくなければ嘘ですよ」ずいぶん変な言葉だと思うが、酔っていた篠田はたいして気にもしなかった。それでその日は終わった。

三日後、会社に行くと社内が大パニックに襲われていた。何事かと思いながら、パソコンを立ち上げて、篠田はその原因に気がついた。社内全員宛てにあるメールが送られていたのだ。内容は篠田の上司の不倫を暴いたもので、メールにはご丁寧に上司と不倫相手が腕を組んでホテルから出てくる様子の写真が添付されていた。社内全員だから、もちろん会社の上層部にもメールは届いている。上司は呼び出しを食らい、何かしらの処罰を下されたようだった。詳しい内容はわからないが、噂では来月にも地方に飛ばされるとのことだっ

た。篠田とその上司は性格が真反対に近く、ことあるごとにぶつかっていたので、篠田は上司のことを普段からあまりよく思っていなかったという。だから、その時点では「ざまあみろ」と思った程度だった。犯人さまさまだと。

ところが、それから四日後、今度は別の内容のメールがまたもや社内全員に送られた。今度の中身は、篠田の同僚が得意先の企業と癒着し、不正に献金を受けているという内容のものだった。上司に関するメールはプライベートに関するものだったから社内でも形だけの犯人探しで済ませていた節があった。ところが、今度のメールは違う。今度も資料が添付されていたが、内容は、社外秘の、しかも秘密裏に作成されていたものだった。誰がどのようにして調べて、どうやってメールを社内全員に送ったのか。犯人は社内の人間なのか。総務部が調査を開始し、誰もが疑心暗鬼の態を見せた。篠田以外は。そう、篠田だけが別のことを考えていたのだ。

田中昴と名乗る人物に滔々と愚痴をぶちまけたあの晩のことだ。篠田はまず上司の悪口をさんざん男に吹き込んだ。つまらないことでいちゃもんをつけてくる。気分屋で日によって言うことが違う。失敗の責任を部下に押しつけ、成果が上がるとすぐに自分の手柄にする。とお決まりの文句をうんぬん。そして、上司が浮気をしているという事実も。それが終わると、今度は同僚の悪口を続けた。おそらく得意先と癒着しているだろうという考えも合わせて。

偶然だろうと篠田は思った。だが、偶然にしても気持ちのいいものではなかった。「人生は心地よくなければ嘘ですよ」と言った男の声が頭から離れない。篠田はあの晩、ほかに男に何を語ったかを必死になって思い返したという。

経理の古株である吉見礼子という女性の悪口を言った気がする。やたらと早く子供を作れと言ってくる妻の両親に対しての憤りも明かしたかもしれない。妻への不満もぶちまけてしまった気がする。

気のせいだとは思うものの気持ちはすっきりしない。そんな状態でいるなか、経理の吉見礼子が会社を辞めるという話が出回りはじめた。偶然にしては出来過ぎている。何より、その順番が篠田の語った通りなのだ。もう一度同じバーに行き、田中昴を問い詰めることも考えた。だが、本当に田中昴の仕業だとしたら、と思うと怖くてできなかった。田中昴は人を追いつめる術を知っている人間かもしれない。そんな男を相手にしたら、今度はこっちが追いつめられるかもしれない。

「だからさ、代わりにお前に田中昴を調べてほしいんだ」

「なんで俺なんだよ。そういうのは探偵とか便利屋とか、場合によっては警察にでも相談したらいいだろう」

「おおごとにしたくないんだよ。ただの勘違いってこともあり得るしな。その点、お前ならうまく立ち回れるだろう。その、仕事柄さ。それにほら、わかるだろう」

やっぱりそう来たかと俺は思った。俺の職業はフリーのライターだ。そのことを告げると業界関係者以外の大抵の人は誤解をする。潜入捜査をしたり、人の秘密を探ったり、隠された事実を明らかにするために動いたり。そんなおかしなジャーナリストなんて、フリーのライターのうちの一パーセントにも満たないだろうことを俺は知っている。でも、なぜか多くの一般人はそう思うらしいのだ。おそらく篠田もその口だろう。

「俺は何でも屋じゃないんだぜ。そんな頼みごと、引き受けないよ」

「金は払う。必要経費とは別に謝礼もする」

「そういう問題じゃないんだよ」

きつい口調で言うと、篠田は少し黙ってしまった。それでも篠田は頼み込んでくるだろうな、と俺はぼんやりと思っていた。一見弱気に見えるものの、じつはかなり強引な篠田の性格からして、そうなるのはほぼ間違いない。

結局、俺は篠田の頼みを聞くことになる。わかっていたが、俺はそれでも篠田の言葉を待った。予想外に篠田は意外なことを告げてきた。

「でも、田中昴だぞ。なあ、この問題が解決したらさ、それがどんな形であれ、お前の自由に発表したり、活かしてもらっていいからさ。俺の名前を出してくれてもいい。ルポでもエッセイでも記事でも、そうだ、小説でもいい」

小説という響きに俺は惹かれた。そんな話がなかったとしても、俺は篠田の頼みを引き受ける覚悟でいた。だが、小説にしてもいいという提案は、俺にとって考えてもみなかった魅力を放っていた。とっさに「いける」と思ってしまったのだ。現在の俺はしがないフリーのライターだ。仕事だってそうそうあるわけじゃない。現実問題、三十二歳という年齢は俺に重くのしかかってきている。そろそろ何かひと花咲かせないと、このままでは先の人生設計すら考えられない。この事件とも呼べない事件らしきものを解き明かす。その過程を小説として描く。面白そうじゃないか。どこかの出版社に持ち込めば、もしかすると売れるかもしれない。頼みごとを聞

くつもりでいたにもかかわらず、チャンスだと俺は思ってしまった。

「わかったよ」

気がつけば俺は篠田にそう返事をしていた。こうして俺の小説は始まったのだ。

SIDE B-1

篠田から得た情報は、バーの場所と「たなかすばる」がいたのが木曜日だったということ、それとたなかすばるの容姿についてだけだった。手がかりとしてはあまりに少ないと佐倉は思った。だが、しかたがない。とりあえず行ってみるしか方法はない。

バーは神保町の裏通りに建つ古びたビルの二階にあった。狭い入口を前に時計を確かめる。時刻は午後六時十二分。バーが始まるには少し早い時間だ。神保町は名立たる古本屋街だ。大通り沿いにも裏道にも多くの古本屋が溢れている。本でも眺めながら街を散策すれば、適当に時間を潰すのには困らない。

佐倉は少しばかり歩いて、バーからあまり離れない程度の距離にある一軒の古本屋に入った。両側の壁にずらっと本が並ぶほか、中央に両面の本棚が一本ある。棚を見ると、映画や演劇関係を中心とした本がずらりと並んでいた。中には『日常生活における演技論』というタイトルの本や『弱者を活かす作劇術――人を追い込む物語の仕組み』などという本まである。ジャンルに特化しているのは神保町の古本屋ではよくあることだ。典型的な街の小さな古本屋といっていい。

興味の向くままに適当に手を伸ばし、本を一冊取る。『狐憑きの真実』という本を選んだのは、おそらく佐倉の頭の片隅にたなかすばるのことがあったためだろう。篠田は「まるで狐の面のような顔をしていた」と言っていた。とはいえ、その本とたなかすばるが関係あるとは思えない。佐倉は苦笑いを洩らし、読むともなくページをめくった。

どれくらいの時間が経っただろう。本に夢中になっていると不意に、

「目的を阻害するようなものがあるのなら、それはどのような手段をもってしても排除するべきですよね」

と声をかけられ、佐倉はビクッと身体を震わせた。とっさに店主かと思ったが、店主の姿は店の奥にあるレジのさらに奥に見てとれた。慌ててて振り向くと、そこにはまるで能面のように表情のない男が立っていた。

「あの、何か？」

尋ねつつ佐倉は男の様子をうかがった。スーツに身をかため、身なりはきちっとしている。会社員のようだが、表情がないのが気にかかる。細い顔に細い目。色白で和風の顔付きだ。一瞬「たなかすばる」という言葉が頭をよぎり、佐倉は否定するかのように軽く頭を振った。そんな偶然はあり得ないだろう。男はしばらく表情のない目で佐倉を見つめていたが、ほんの少しだけ口元を緩めて微笑みを浮かべた。

「いえ、すみません。独り言が大きかったようで。お気になさらず」

「ああ、なんだ、そうですか。いえいえ」

佐倉は返事にもならないような返事をし、できる限り意識を集中させて本に戻った。文字を目で追うが、中身がまったく頭に入ってこない。男がすぐそばで自分に視線を投げかけているような気がしてならない。本を手に取るでもなく、ただじっと佐倉を凝視している。そんなふうに感じ、佐倉は動くことができなかった。

手に汗が沁み出してくる。ページをめくる手が心なしか震える。十分に時間を置いてから、佐倉はそっと視線を後ろに向けた。我慢しきれなくなり、ちょっと疲れたという振りをしながらだ。男の姿ははすでにそこにはなかった。ほっとして店内を見回すが、やはり男の姿はない。店内にいるのは佐倉一人きり。店の奥で店主が大きな欠伸をしているのが見えた。

あの男は本当にただの客だったのか。それとも何か「たなかすばる」と関係する人物なのか。店の関係者か。いくら考えても埒が明かない。時刻を確かめると、八時を少し回ったところだった。考えても仕方がないことを考えるのはもうよそうと佐倉は思った。これぐらいの時間ならもうバーは開いているかもしれない。佐倉は元の位置に本を戻すと、古本屋をあとにした。

バーの入っている建物に近づくと、先ほどまではなかった黒板式の看板が目に入った。「ＢＡＲ　依頼人」という文字といくつかのメニューがチョークで書かれている。篠田はバーの名前を覚えていなかったが、聞いた場所からしてここで間違いはないはずだった。狭い階段を昇り二階に上がると、一枚板の木のドアが現れる。ドアには「ＯＰＥＮ」と書かれた札がぶら下げられていた。開店しているのだろう。佐倉はノブを引き、ドアを開けた。